

Title	杵屋正邦における邦楽の解体と再構築
Author(s)	吉崎, 清富
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42863">https://hdl.handle.net/11094/42863</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	吉崎清富
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第15638号
学位授与年月日	平成12年6月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	杵屋正邦における邦楽の解体と再構築
論文審査委員	(主査) 教授 山口 修
	(副査) 教授 根岸 一美 教授 竹中 亨

#### 論文内容の要旨

本論文は、現代邦楽の領域で貢献度の高い杵屋正邦（1914-1996、きねや・せいほう、本名、吉川博久）を論じることにより、20世紀日本における多元文化主義的な音楽文化のあり方を巨視的に記述分析した音楽学的な作曲家個人研究である。論者自身が作曲家であるため一貫して音楽構成法を理論的に解明することを念頭におきつつも、広義のフィールドワークの手法をとっている。すなわち、膨大な量におよぶ楽譜や文字による公刊物や手書きの書伝情報を「足で」収集するだけでなく、書き留められた情報の背後にある時代思潮や個人的思惟の変遷を明確に跡づけるべく、対象作曲家を遠近の距離から取り囲んでいた人びととの人間関係を築いてゆく過程から得られる口伝情報をも集積したうえで、楽器やコンピュータなどの物的な研究手段を単なる道具以上のものとして活用している。

全五章のうち第一章「杵屋正邦という人」で旧態依然の三味線音楽の世界に生まれてから現代邦楽の新しい手として活躍するまでの経緯を伝記風に綴り、第二章「邦楽改革とその同志たち」では、伝統邦楽につきまとう様式上の、また、社会的な人間関係のうえでの「足枷」から自由になろうとした一個人のあがきの軌跡と一致する現代邦楽前史が記述され、以下の論文主要部分へと導かれる。

第三章「正邦の意図したもの」は、日本近代化の過程で危機に直面することになった邦楽を再興させるためには、「解体と再構築」してこそ伝統が現代的な意味をもつことになると考えた正邦を論じている。すなわち、作曲のための音素材を現実新しいかたちで鳴り響かせるために、楽器の奏法と編成の可能性を拡大させ、特定流派に偏らない楽譜に書き留め、演奏家を育成するといった仕事をこなしことが述べられる。そのような活動の所産としての「正邦の作品」を概略する第四章では、現段階で57種目1267曲を数える全作品をデータベース化し、正邦の創作意図および創作活動の全体像が提示される。さらに第五章「正邦の作曲法」では、熟考のうえ特定の作品群を分析のための対象母体として選定し、作曲家としての論者による「感知的レヴェル」と対象作曲家にみとれる「創出的レヴェル」とを重ね合わせた、いってみれば「対話」的な方法で論じている。

論文をしめくくる第六章「正邦が残したもの」では、邦楽界に内在する体質に加えて、明治期以降の音楽教育行政に見られる西洋偏向を批判しつつ、多様化がますます進行する現代から未来にかけての日本におよぼすであろう正邦の影響とその効果を指摘している。

(分量 本文縦書198頁400字詰原稿用紙換算約600枚 付録等38頁 作品目録、参考文献、日英長短要旨)

## 論文審査の結果の要旨

音楽の現代的状況は、世界的な規模での画一化への傾向と表裏一体をなしつつ、いわば周縁的な脈絡に取り残された、もしくは、追い込まれた多くの「小さな」伝統がそれぞれの伝統を新しい社会のなかで活性化しようとあがいているところに特徴がある。音楽学としても、それらふたつの傾向にみあったかたちで「社会から学び、社会に貢献する」研究態度が望まれているように思われる。その意味において、本論文は地球規模で存在意義を拡大してきた近代西洋音楽を相対的な準拠枠として位置づけるにとどめ、いわば周縁的な状況におかれた邦楽や現代邦楽に中心性を復権させようとした時宜を得た研究である。そうした巨視的視座にくわえて、フィールドワークやコンピュータ操作によるデータの収集と整理分析が、今後あり得るデータ増量にも充分に対応できるかたちでなされている。

ただし、本論文にいくつかの短所も見受けられることも否定できない。たとえば、伝記的記載や作品記述で厳密な引用方法が注記などの形式で示してあれば、後学による再検討や再解釈のために当論文の価値がより大きくなっていたと考えられる。また、論文の構成において、問題の設定とその解明の手順が読者にとって理解しやすくなるような工夫が望まれる。

しかしながら、これらの短所は本論文に続くものとして補うことが可能であり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。本論文は、作曲家研究として従来水準を超える優れた論考である。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。